

バルザックの正統王朝主義の諸問題

久津内一雄

はじめに

バルザックの政治・社会観を年代順に詳細に研究したベルナール・ギュイヨンが主張するように、1830年までのバルザックの政治・社会観には一時期混乱があるにしても、大筋においては一本の筋が通っているように思われる。また同じくギュイヨンが主張するように、後のバルザックの正統王朝主義は1830年までのバルザックの政治・社会観の延長にあり、その論理的な帰結であるように思われる。しかし私がそう思うのは、バルザックの政治・社会観の現象面の捉え方のレベルでの同感であって、その背後にある本質面の捉え方ではギュイヨンと私の見解は決定的に異なっている。本質面での捉え方の相違は後ほど論ずるとして、その捉え方の相違ゆえに、同一の資料からギュイヨンは為政者の立場からマキャヴェリズムを発揮する冷徹な政治・社会思想家を読みとり、私はバルザック＝マキャヴェリストの背後で、感性が脈打ち民衆や労働者に深いところで共感し、連帯しうるバルザック＝ヒューマニストを読みとることになる。ギュイヨンの問題意識および見解の特徴はクルチウスが着目した観点（バルザックの芸術と思想の根底に彼の神秘主義を見ようとする観点）に立って、バルザックの政治・社会観の根底に彼の神秘主義を見て、神秘主義との関わりの中でバルザックの政治・社会観の首尾一貫性を問題にするところにある。ギュイヨンによると、バルザックには若い頃から二つの根本的な傾向がある。一つは世界の統一への志向であり、これは政治面では正統王朝主義に発展するものである。もう一つはアナキー、反社会的なものへの志向であり、これは彼の強者・卓越者に対する共感、ひいてはヴォートルランの創造に至り、作品の中では現実批判という形をとることになる。そしてギュイヨン

は両者の共通の根底にバルザックの神秘主義の根幹をなすエネルギー論ないしは「宇宙単一論」を見ようとしている。この小論の目的はギュイヨン批判ではないが、彼の見解と私の見解との相違をはっきりさせるために、彼の見解の批判的検討からはじめたい。

ギュイヨンが考えるように、バルザックの正統王朝主義は哲学的世界観に裏打ちされた世界の統一への志向の現われだとしても果してそれが本質的なことであろうか。また若い頃から明らかに見られるバルザックの偉大な犯罪者や強者や卓越者に対する共感が彼の哲学的世界観にもとづくものであり、その共感の作品における現象的側面として現実批判があるのであろうか。前者の疑問は本論で明らかにすべきなので、ここでは後者の疑問の答えと私の考えを述べてみたい。

バルザックは文筆生活を始めた頃から卓越者・強者に対して並々ならぬ興味を抱いていた。1822年の『アルデーヌの助任司祭』、24年の『アネットと罪人』の二つの初期作品に登場するアルゴウはヴォートランの最初の形象である。1825年の『紳士法典』も卓越者、強者に対する共感という主要な問題を含んでいる。『紳士法典』からある一節を引用してみたい。「盗人はたぐいまれな人間である。自然は盗人を寵児として懐胎した。自然は盗人の上にあらゆる種類の完璧さを集めた。たとえば泰然自若とした冷静さや、あらゆる試練にたえる大胆さや、あれほど急速であり、同時にあれほど緩慢な機会をとらえる術や、機敏さや、勇気や丈夫な体質、突き通すような眼、すばしこい手、巧みで自在な顔つきなど。(……)しかしながら彼等はすでにハンニバルやカティリナやマリウスやシーザーの才能の全部を形づくっている⁽¹⁾。」ギュイヨンは、バイロンとゴドウィンの影響以上に、このテーマがバルザックの哲学的世界観の中心をなす世界のエネルギー論的把握に結びついていると見ている。⁽²⁾ 彼の考え方はクルチウスの影響を受けたものであることは明白である。クルチウスの見解を要約すると次のようになる。すなわち人間のエネルギーが最高度に達するのは偉大な反抗者(=卓越者、強者)の場合である。偉大な反抗者はあらゆる人間に対抗し、常に極端に緊張した局面に身を置きながらも、冷静に自己を意

識し、そしてあらゆる困難を乗り越える。このような卓越した個人は人間のエネルギーの権化であると⁽³⁾。卓越者・強者に対するバルザックの共感
は確かに彼の世界のエネルギー論的把握と結びついていると言うことは可能であろうが、このテーマにはより本質的側面がある。それは、大革命に始まり、王政復古時代から矛盾が露わになり始め、七月革命によって発展すると同時に内包していた矛盾が一気に露呈されるフランス市民社会に幻滅する知識人の抱いていた痛苦、すなわち「世紀病」と呼ばれているものである⁽⁴⁾。この痛苦が、ルカーチが述べるごとく、王政復古から七月王政の終りまで見られる幻滅小説の共通した、社会のみじめな「散文主義」に対する告発になる⁽⁵⁾。バルザックの芸術・思想の一大特徴である強烈な現実批判は哲学的世界観にもとづいたバルザックの反社会的なもの、アナキーへの志向の現象的なものではなくて、バルザックの市民社会に対する幻滅、怒りが現実批判という形をとらざるをえなかったという意味での、彼の「世紀病」の本質に関わるものである。この側面の方が、ギュイヨンの言う「宇宙単一論」よりも歴史的、社会的にはもとより、構造的にも発生的にもバルザックの卓越者・強者に対する共感のみならず、彼の正統王朝主義をも説明しうるものである。バルザックの卓越者・強者に対する共感
は彼の市民社会批判の本質に関わる表現であるように、彼の正統王朝主義は彼の中で理想化された、今はなき王政に基づく市民社会批判の重要な表現である。

バルザックの正統王朝主義を考えるうえで百人のギュイヨンをひとたばにしたものよりも示唆に豊んでいるのがエンゲルスのマーガレット・ハークネスへの手紙の手稿である。エンゲルスの指摘は次の通りである。①バルザックは政治的には王党派であったけれども、彼が最も深く同情する貴族を没落するものとして批判的に描かなければならなかった。②バルザックは彼の政治的偏見にさからってまでも、彼の最も激しい政治上の敵対者である共和派の英雄を賞賛してはばからなかった。③バルザックは民衆や労働者をその当時においては唯一見い出される場所に見てとった。この三つのエンゲルスの指摘はバルザックの正統王朝主義の特徴を実にみごとに

言いあてたものであり、私の関心と問題意識はエンゲルスが指摘したことの背後をさぐることにある。具体的に述べれば次のようになる。①バルザックが政治的には正統王朝派であったと言うときに、バルザックはどんな正統王朝主義者であったのか、なぜバルザックは彼の政治・社会観の社会的表現を正統王朝派に求めなければならなかったのか。②バルザックが彼の政治的偏見にさからって共和派の英雄たちを賞賛しなければならなかったという場合に、バルザックがなぜ彼自身の政治的偏見に反して行動しなければならなかったのか、正統王朝主義を標榜した、正確には標榜せざるえなかったバルザックの人間性の中にそう言える要素が内包されていたのではないか。

バルザックの正統王朝主義を見る前に、予備的作業を一つ行なわなければならない。バルザックの政治・社会観に決定的な影響を及ぼした七月革命を彼がどのように受けとったか、それが彼の心にどのような作用を及ぼしたのかということを見てもおかねばならない。

1 バルザックと七月革命

バルザックと七月革命との関わりを知るうえで重要な資料が『パリ通信』と『あら皮』である。1830年9月にトゥレーヌ地方からパリにもどったバルザックが七月革命の結果に接して、その印象と感想を述べたのが『パリ通信』であり、これを書きながら彼が構想を練っていたのが『あら皮』である。

七月革命に対する失望が『パリ通信』の基調となっている。バルザックは1831年1月9日付の通信(第11通信)で、ジュール・ジャナンの『死んだロバとギロチンにかけられた女』と『告白』、ノディエの『ボエームの王の物語』、スタンダールの『赤と黒』、バルザックの『結婚の生理学』に言及して、この5つの作品は「幻滅派」に属し、これらの文学的着想には「滅びゆく社会の屍臭」があると述べている⁽⁶⁾。そして同じ通信の少し先でバルザックは次のように述べている。「『結婚の生理学』、『告白』、『ボエームの王』、『赤と黒』は一つの新しい組織を期待してきた古い民衆の内在

思考の表現である。それは辛辣な嘲笑である⁽⁷⁾。」文脈をたどれば、帝政時代および王政復古時代に青年時代をすごした作家たち（ジャンソン、ノディエ、スタンダール、バルザック等）は七月革命に「一つの新しい組織」を期待していたが、しかし彼等の期待は「幻滅」に終わった、従って彼等の作品は文学的着想として「滅びゆく社会の屍臭」を持ち、社会に対する「辛辣な嘲笑」であるということになる。さらに同じ通信のもう少し先を見ることにしよう。バルザックは次のように述べている。「おそらく一人の人間が現われて、ただ一つの作品でこれらの四つの観念を要約するであろう。そしてそのとき19世紀はあるおそろしいラブレールを持つことになるであろう⁽⁸⁾。」この言葉は疑いなく当時すでに『あら皮』にとりかかっていたバルザックの抱負を示すものであり、1831年の『あら皮』の序文でバルザックが書いている次の言葉、「われわれは今日嘲笑することしかできない。嘲笑は瀕死の社会のいっさいの文学である⁽⁹⁾。」から明らかかなように、『あら皮』は「幻滅派」に属する作品ということになる。

まず、「一つの新しい組織」、「幻滅派」、「滅びゆく社会の屍臭」、「辛辣な嘲笑」の内容を深めることにしよう。1830年は社会史的には大地主を中心とした王政から大銀行家と一部の産業ブルジョアを中心とした王政へと変るフランス市民社会の発展期であった。それは文学史上においても一つの転換期であった⁽¹⁰⁾。1830年と言うよりも1830年代前半の短い時期と言う方がより正確であるが、この時期の特徴点をあげれば次のようになるであろう。①シャトーブリアンなどの一部の例外を除いて、作家たちは社会の中に「屍臭」を感じとりながらも、社会と深く関わり、そこから文学的滋養を吸収していた。②この時期の作家たちは「瀕死の」あるいは「滅びゆく」という社会観を抱きつつも、次の世代の作家たちの抱いた「不動の」あるいは「永遠の」または「不変の」という社会観は見られず、社会は今後どのような方向に進むかわからないが、とにかく動いているという意識が支配的であった。③七月革命の「幻滅」の後でも、サン・シモン主義などのユートピア思想の普及に見られるように、この時期の作家たちは絶望的な宿命観や無感動とはまだ無縁であった。④「辛辣な嘲笑」あるいは

「われわれは今日嘲笑することしかできない」と言う場合でも、彼等は社会を真正面から見すえ、いわゆる嘲笑や自虐とは無縁で、健全な批判精神を持ちえていた。

バルザックの言う「幻滅」には、まだ躍動しているフランス市民社会の中にすでに「屍臭」を嗅ぎつけた作家たちの先見性と失望とが含まれている。大ざっぱに言って、またよく言われるように、この「幻滅」という痛苦が王政復古時代から七月王政の間に「世紀児」と呼ばれた若き知識人たちにつきまどっていた「世紀病」である。しかしバルザック自身の抱いた「幻滅」とは「世紀病」には違いないが、より具体的でよりアクチュアルな形をとる。バルザックに「幻滅」を引き起こしたのは、七月王政の「老人政治」と内外の民衆や労働者に対する「裏切り」である。バルザックは基本的には復古王政と同じ「老人政治」であるとして、七月王政を批判する。バルザックは第一通信で次のように述べる。「もし共和政、帝政、あるいは王政復古という理念の中で育てられた人々を公務につけ続けるならば、われわれは自らの運命に絶望しなければならない。なぜならば、われわれはぬけ出たばかりのわだちに再び陥いることになるからである⁽¹¹⁾。」またバルザックは第二通信で次のように述べている。「われわれは偉大な革命を行なった。しかるにそれは幾人かの小人物の手中に落ちた。これこそわれわれのあらゆる不幸の秘密である⁽¹²⁾。」バルザックの「幻滅」は、復古王政に感じていた彼の不満が七月革命によって解消されなかったこと、復古王政の事なかれ政治にナポレオンがモデルとなる若き天才による政治が取って代れなかったことに帰因している。バルザックには七月革命について次のような基本的認識がある。「われわれは権力を移し変えるために行動した。しかし権力は変化しなかった。その理念は以前と同じである。それは利己的な権力である⁽¹³⁾。」バルザックが七月革命に抱いた期待は、民衆や労働者を何ら考慮に入れない人民不在の政府を倒して、人民の幸福と平穏が保障される理想化された王政が実現されることであった⁽¹⁴⁾。しかし現実の七月王政は彼の理想から程遠い、王政復古時代よりもむき出しの収奪と打算が支配するブルジョア王政であった。バルザックは七月王政

に欺瞞の烙印を押し、そのブルジョア色を痛烈に皮肉っている。「前の政府は墮落しかつ墮落させる素行の悪い女であったが、あの女を相手ならまだしも笑うことができた。今度の政府は操の堅い女の態度をそっくりとっているが、名誉心の代償を高く払わせることであろう⁽¹⁵⁾。」また「銀行や事務所出身のこれらの大市民たちのブルジョア的習慣のけち臭さは、わが政府に恥ずべき烙印を押し、歴史上に未曾有の滑稽さを刻んでいる⁽¹⁶⁾。」

バルザックの「幻滅」のもう一つの理由は政府の内外の民衆や労働者に対する「裏切り」である。バルザックは次のように述べている。「真の勝利者たちはいかなる戦いにおいてもそうであるように、かなり冷遇されている。若干の官庁における彼等に対する待遇は気の毒なものだが、もう少したてば官僚たちは彼等を反徒と呼ぶことであろう⁽¹⁷⁾。」また、「われわれは去年の冬に凍死した人々のために踊ることができた。われわれは七月の負傷者の回復をたたえるために踊ることもできたであろうに。そしてわれわれは古い王朝からの出発のために、新しい王朝の出現のために踊ることもできたであろうに⁽¹⁸⁾。」

大銀行家たちや一部の企業家の革命成果の横領や「栄光の三日間」を闘い、倒れた民衆や労働者が革命に酬われなかったこと、人間らしい扱いを受けていないことに対するバルザックの怒りはとりもなおさず彼の感性の豊かさを物語っている。一方、「栄光の三日間」は単にフランス国民を熱狂させただけにとどまらず、ベルギー、ポーランド、イタリアなど正統主義とメッテルニヒ体制に苦しめられていた諸国民を奮い立たせた。これらの諸国民の蜂起が数ヶ月の間フランスの世論の注目の的であった。バルザックはこの時局に敏感に反応している。バルザックはまずベルギー革命に対するフランス政府の援助のためらいを手きびしく批判する。「われわれ全員はブルジョアジーが民衆を裏切ったことを知って嫌悪した。そしてこの国に関しては、われわれは商品を安く買ったたくために隣人が破算するのを待っている商人のようである⁽¹⁹⁾。」ポーランド国民の蜂起に関してバルザックは次のように述べている。「フランスは、(……)かつてポーランドがフランスのために流した血を返してもらうためのポーランドの努力が

無に帰するのを待っている。民衆個人個人は名誉心と誠実さを持っているのだが⁽²⁰⁾。」また「ポーランド民衆は立ち上ってわれわれの心を静めてくれる。ポーランド人はわれわれの身代りである。彼等はわれわれのために死ぬだろう。そしてわれわれは彼等を不滅にするために生きるだろう⁽²¹⁾。」このように、ベルギー、ポーランドの革命に対する共感・連帯もとれるバルザックの感情は、彼が国の内外を問わず、専制に対して蜂起し、闘い、倒れた民衆や労働者の人間的尊厳を感じ取れる人物であったことを物語っている。一方でバルザックは「上流階級の平穩を保障する」ために「貧しい階級を規制すること」を説きながらも⁽²²⁾、一方で国民軍による「人民の友の会」の閉鎖に抗議し⁽²³⁾、騒擾取締令に怒りを感じうる人物であった。バルザックは次のように述べる。「シャルル10世は兵士たちに民衆に発砲するように命じた。というのは彼は自分の政府が危機に瀕していると信じていたからである。そこでわが内閣は騒擾取締のための結構な小法令を持ち出した。そして最近でもまた力で暴徒を一掃することが問題となっている。もっとも合法的になされる「うやうやしい解散勧告」の後での話だが。これらの二つの一斉射撃の間には警視と法律の前文との相違ぐらいしかないであろう⁽²⁴⁾。」

バルザックの民衆や労働者への共感の仕方は特徴的である。民衆や労働者は日常は「貧しくて無知」であり、お上から「仕事とパン」が与えられるべき受動的な存在である。ここにおけるバルザックの民衆や労働者に対する感情は同情の域を出ていない。しかし彼等が歴史的忍従から目ざめ、自らの手で自らの運命を切り開こうとするとき、バルザックの感情は人間的共感、連帯へと発展する。このことは、バルザックが政治上の偏見にもかかわらず、歴史の必然とその厳粛さを直観的に感じとれる豊かな感性を持った人物であったことを物語っている。従ってそれゆえに、バルザックの七月革命に対する「幻滅」は深刻なものであったと逆に言うことができる。

話しを元にもどすと、「幻滅派」とは、一般的に言って、バルベリスの言うように、七月革命に幻滅した者たちの党派を意味するのではなく、帝

政時代および王政復古時代に青年時代をすごした「世紀児」と呼ばれた作家たちが1820年代から30年代前半にかけてのフランス市民社会に幻滅したという、「幻滅」の共通体験とその表現の集約されたものを意味している⁽²⁵⁾。なるほどバルザックやスタンダールやヴィニーなどの「幻滅」は深刻であるが、「世紀児」という言葉の混乱を避けるために、バルザックやスタンダールやヴィニーなどの「世紀児」と次の世代のボードレールやコント・ド・リールの48年の革命参加として復活する「世紀児」とは当然のことながら区別して考えなければならない⁽²⁶⁾。ボードレールやコント・ド・リールやあるいはフロベールの抱いた「幻滅」とは完全に社会に絶望している精神状態、出口のない絶望であり、そこから宿命観、無感動、嘲笑等の48年の「世紀児」を特徴づけるものが生まれてくる。しかし30年の「世紀児」の抱いた「幻滅」とは、なるほどバルザックやスタンダールやヴィニーなどにおいては深刻であるが、社会の中に彼等が「屍臭」を感じ取りながらも、まだ社会に引き付けられている精神状態を現わしている。この時期の特徴点についてはすでに述べたが、補足的に言えば、七月革命に対する「幻滅」の後もしばらく彼等が自己の「卓越性」の意識を持ち続けえていたことは48年以後と比べて対照的である。

1830年代の初頭のまだ躍動期にあるフランス市民社会の中にすでに「屍臭」を嗅ぎ出したバルザックが『あら皮』の序文で「われわれは今日嘲笑することしかできない。嘲笑は瀕死の社会のいっさいの文学である」と言うときに、われわれが念頭に置かなければならないのは次のことである。

- ①その背後には七月革命に対するバルザックの具体的でアクチュアルで深刻な「幻滅」があること。
- ②この「幻滅」の後でも、バルザックは社会をまじめに、誠実に、真正面から見すえ、健全な批判精神を持ちえていること。
- ③「滅びゆく社会の屍臭」あるいは「瀕死の社会」という表現の中味は、次の世代の作家たちの抱いた「不動の」あるいは「永遠の」または「不変の」という社会がもはや出口を持っていないという絶望的な社会観に発展していくものには違いないが、まだそこまでの深刻さを持っていないこと、こうおさえたいうえで、バルザックの先見性を問題にすべきである

こと。

ここで今まで述べてきた論点を整理してみたい。①バルザックを決定的に正統王朝派に走らせたのが七月革命に対する「幻滅」、七月王政の中庸政治に対する失望である。②バルザックが『あら皮』を書いた背景には七月革命に対する「幻滅」がある。③従ってバルザックの正統王朝主義と彼の文学作品（少なくとも『あら皮』）との間には、彼の現実との関わり方、現実に対する姿勢の点で密接な関係がある。以上の問題点を論証するためにはどうしても『あら皮』を分析しなければならない。

Ⅱ 『あら皮』

『あら皮』の全体の構成が三部に分れているように、この小説の内容は三つの要素によって構成されている。まずはじめは、王政復古―七月革命―七月王政とダイナミックに社会が躍動した時期の社会描写の要素である。次は、自己の願望と現実との間のジレンマに苦悩する青年の告白物語の要素である。最後は、欲望と生命との間の対立という永遠の命題を現わす護符を中心として展開する幻想的ないしは観念的な物語の要素である。この三つの要素が各々絡み合いながらも、それぞれが強調されることによって、第一部（社会描写の要素）、第二部（青年の告白物語の要素）、第三部（幻想的ないしは観念的な物語の要素）というように構成されている。従ってどの要素を強調するかによって、『あら皮』は三様の姿を見せることになる。しかし、まずここで強調しておきたいことは、この小説はいわゆる哲学小説、幻想小説の性格を持っているが、本質的にはそうでないということである。アクチュアルな青年の生き方の問題として捉えて、はじめてこの小説のリアリティー、アクチュアリティーが理解できる。そこに力点を置くことがきわめて重要であることをはじめに強調しておきたい。

この小説は、バルザックのはじめの構想では、主人公のラファエルが老ユダヤ人にだまされて、皮が自然にしか縮まないことがわかって憤死するという幻想的な物語にしかすぎなかったらしい⁽²⁷⁾。従って、社会描写の要素と告白物語の要素は構想の変更がなされたとき加えられたことになる。

その変更が正確にいつかわからないが、とにかく1831年3月7日の出版者のカネルへのバルザックの手紙に、確定した構想による『あら皮』の執筆のことが語られている。「私は『あら皮』を完成させるために休みなく、気晴らしもせずに仕事をしています。今晚第一部を完成するつもりです。第一部が最も苦勞しましたし、そこに本全体の成否がかかっています。この骨の折れる仕事が終れば、残りは自然にうまく行くでしょう⁽²⁸⁾。」この手紙で重要なことは、確定した構想では第一部が小説の土台となり、『あら皮』はこの第一部の成否にかかっているということである。事実、完成した『あら皮』は第一部が土台となって、三つの要素が有機的関係を持つに至っている。まず第一部で何らかの理由によって絶望したラファエルが賭博場に現われる。それから彼はたまたま骨董屋に立ち寄り、運命的に護符に出会う。護符の力によって、ラファエルは銀行家の催す饗宴に参加し、乱痴気騒を面の当に見る。第二部では、その喧噪も峠を越したころ、ラファエルは彼の絶望の理由を語る。翌日護符の効力によって、彼が億万長者になったことが告げられる。第三部では、護符の収縮がラファエルを逃れようのない死の恐怖に陥れ、社会から逃避させる。第三部の幻想的な物語を身近なものに、アクチュアルなものにさえしているのは、第一部が土台になって、第二部のラファエルの告白が過去と現在とを結びつけ、想起された過去によって、現在がいかに陰うつであるかを示しているからである。その意味で『あら皮』がリアリティー、アクチュアリティーを持つのはひとえに第一部と第二部のおかげであるという観点に立てば、おのずから第一部と第二部に重点を置いてこの小説を見ることになる。

具体的に『あら皮』を見る前に、第一章との関連で私の問題意識と問題の立て方について述べておこう。『あら皮』は次のような時代背景をもっている。すなわち、大土地所有者（おもに土地貴族）を中心とした王政（大革命から始まるフランス市民社会の後退期）から大銀行家と一部の産業ブルジョアを中心とした王政へと変るフランス市民社会の発展期であると同時に、七月革命を契機に内包していた矛盾の露呈に拍車のかかる時期にこの小説は構想され、書かれ、その時期を物語の背景に持っていること、

そして『あら皮』には、その時期の特徴を最も象徴的に現わす七月革命の結果がバルザックに及ぼした影響の痕跡がやはり深く刻まれていること、以上が私の問題意識である。

第一部の饗宴を見るまえに、饗宴の中に挿入された形になっている第二部のラファエルの告白を見ることにする。それは筋の経過の時間的順序の理由ではなく、ラファエルの告白に様々に深く時代の烙印が押されているからである。

ラファエルの告白にバルザックの個人的な体験が多く盛り込まれていることは、今まで多くの研究者が確認してきたことである。ラファエルの告白が持っている意味は第一部と関連づけてはじめて明白になる。この告白が小説の中で重要な意味を持ち、読者を引きつけるのは、社会ドラマに過去への広がりを持たせているからに他ならない。この告白に焦点を合わせるならば、饗宴という七月王政におけるドラマは「世紀児」のドラマの延長線上にあることが明らかになる。すなわち『あら皮』は、大革命に始まり、王政復古時代から矛盾が露わになり始め、七月革命によって発展すると同時に内包していた矛盾が一気に露呈されるフランス市民社会に幻滅する「世紀児」のドラマである。小説の冒頭に、「世紀児」の雰囲気をつかやわせながらラファエルは登場する。「遊び人たちはただのひと目で、この新参者の顔になにかしら恐ろしい秘密があることを見てとった。彼の若い顔は憂いありげな魅力をとどめ、彼のまなざしは裏切られた努力、多くの誤った期待を物語っていた。(29)。」この「裏切られた努力」あるいは「多くの誤った期待」がラファエルの告白の中で具体的な姿を現わすことになる。

ラファエルは父親の破算と続くその死によって、生れて初めて人生の試練の場に立たされる。孤児として初めての社会との出会いである。親類の冷淡さ、社会の不寛容さに出会って、ラファエルは孤独、不安等の感情に襲われるが、一方自己を卓越者であると感じ、自己の将来に強い期待を抱いている。彼は学問に自己の「卓越性」を見い出して、その社会的実現を計ろうとする。屋根裏部屋での「テバイードの隠者」のようなラファエル

の生活が始まる。不安と期待とが交互にラファエルをとらえ、彼の内部に感情の乱れを生じさせる。ラファエルに不安と期待とを抱かせた屋根裏部屋での研究生活が結局は彼を満足させない。彼は常に外側の世界（社会）に引きつけられている。ラファエルという人物を特徴づけているのは、社会からの孤立感といつかは世に認められるだろうという期待感である。パラレルなこの二つの感情の同居が一般的に言って1830年代前半の短い時期の「世紀児」を特徴づけるものでもある。ラファエルの抱いた意識（「私の人生は一つの残酷な対立であり一つの永遠の虚偽でした⁽³⁰⁾。」）は「世紀児」の抱く幻想、夢想、願望などとそれらの実現にはほど遠い現実との間の対立感を現わしているが、同時にそれは社会からの孤立を感じながらも、自己の「卓越性」の社会的実現を計りたいという、「世紀児」がまだ社会に失望しきっていない精神状態を現わしている。社会を磁石にたとえるならば、その牽引力と反発力とがラファエルに人生に対する期待もさることながら不安とためらいを抱かせている。

ラスチニャックが登場すると、ラファエルにおける牽引と反発のバランスが一時的に崩れ、ラファエルは強く社会に引きつけられる。彼は社会の象徴とされているフェドラと出会う。ラファエルが彼女に、彼の思い描いた理想の女を見い出すには、フェドラはあまりにも冷酷でエゴイストでありすぎた。ここで問題となっていることは、ロマンチックな夢はすぐに破れるという一般的妥当性ではなく、フェドラという上流社会の冷酷な女が、ラファエルという「世紀児」に幻滅を感じさせたこと、フェドラが市民社会の掟である利己的打算を体現していることである。その意味で『あら皮』は『幻滅』のテーマを先取りしていると言える。

フェドラ＝社会（厳密には上流社会）に幻滅したラファエルは、放蕩による死というラスチニャックの放蕩哲学にもとづいて、放蕩生活に入る。この放蕩哲学は放蕩の社会心理学であると同時に放蕩の「絶対の探求」である。そしてこの放蕩論は老骨董商の生命哲学の裏返しであり、饗宴を貫くモチーフである。ラファエルの放蕩生活は、小説の筋の経過によると、1830年5月の第二週目にラスチニャックと出会ってテーブル通りに居を構え

てから10月の終りの饗宴までの間と考えられる。この4ヶ月半の間にラファエルは心身ともに憔悴し尽すことになる。そしてこの放蕩期間中に七月革命が起こることになる。もっとも6月にラファエルは田舎に出発し、エミールなどの仲間の前に姿を見せるのは10月の終りであるから、ラファエルはバルザックのように七月革命が起きたときには、田舎にいたのかもしれない。ラファエルの告白で気の付くことは、告白には七月革命についての言及がどこにもないこと、6月から10月の終りまで空白になっていることである。これはバルザックが自己の体験をラファエルに当て嵌めたと考えるのが最も自然な解釈である。七月革命が勃発したとき、バルザックはベルニー夫人とトゥレーヌ地方を旅行していた。ところがバルザックは革命勃発の知らせを受けても腰を上げず、9月半ばになってはじめて『パリ通信』を執筆するためにパリに戻る。重要なことは、革命勃発に対してバルザックがジャーナリスティックな反応をしたかどうかではなく、パリに戻ったバルザックが革命の結果をどのように受けとったのか、それが彼の心にどのような作用を及ぼしたのかということである。そして同様の意味で重要なことは、七月革命後の社会の一つの縮図である饗宴をラファエルがどのように見ているか、どのように感じているか、そしてその見方なり感じ方なりに彼の告白がどのように説得性を持たせているかということである。

第一部の銀行家邸での饗宴と第二部のラファエルの告白との間には、小説の筋の経過に従えば、七月革命がはさまっている。重要なことは、七月革命後の社会の一つの縮図である饗宴をラファエルがどのように見ているのか、感じているのか、バルザックが読者にどのように見させ、感じさせているのかということである。

第一部では、バルザックは七月王政における青年群像と饗宴によって現わされた時代の縮図を読者の前に明らかにして見せる。そして冒頭の骨董商の語る護符の神話が革命直後のパリ社会に組み込まれて、神話が現実的な重みを持つことになる。重要なのは、護符が導くところのもの、骨董商が述べたことの裏返しの現実的な恐ろしい姿、すなわち饗宴と乱痴気騒す

る青年たちの群像である。そしてバルザックはこの饗宴の描写に廃虚と死のイメージをダブらせ、読者に「滅びゆく社会の屍臭」を感じ取らせようとしていることは明白である。

饗宴のテーマの持っている最も重要なものは、饗宴が時代の縮図であり、ラファエルの告白がそれに対する異議申し立てとなるものであるということである。ではどのような縮図なのであろうか。この饗宴は七月革命によって権力の座についた大銀行家の催す明確な政治目的を持ったものである。七月革命を権力の単なる移動と見なし、権力の延命手段としてのジャーナリズムの役割を明確に見貫いている新聞記者のエミールは次のように語る。「政府、言い換えれば、かつて聖職者たちが君主政治を操ったように、今日国家を動かしている銀行家と弁護士からなる貴族階級が、あらゆる学派の哲学者やあらゆる時代の権力者にならって、新しい言葉と古い思想で、善良なフランス国民をだます必要を感じたのだ⁽³¹⁾。」そして招待された客は、ラファエルを除いて、七月革命によって一躍時代の寵児となったジャーナリストたちである。政界、財界、ジャーナリズムのつながりが、いわば市民社会の支配体系であり、バルザックはその一断面を描き出している。エミールの言葉はジャーナリズムに身を置く者の多分に自嘲の混った証言である。

先ほど、「ラファエルを除いて」と述べたが、ラファエルはたまたま護符の力によって饗宴に導かれたのであって、彼自身はジャーナリストとして生きようと決意しているわけではない。ラファエルはいわば人生に不安とためらいを感じている青年とでも言うべき人物である。彼は社会から離れて学問に一生を捧げようとしたけれども、学問は彼を満足させない。彼の幸福は社会の中に自己の情熱と行為を位置づけて初めて成立しうるものであるが、しかし彼には常に「私の存在がもはや不可能である世界⁽³²⁾。」という意識がつきまとっている。この意識が人生に対する不安とためらいを作り出す源泉であり、ラファエルという人物の個性を形成しているものでもある。この意識が持っている意味は王政復古 | 七月革命 | 七月王政の時代の粋の中でこれに照明をあててはじめて理解できる。ラファエルのこ

の意識は『幻滅』のリュジアンリュジアンの挫折感を先取りしたものである。ラファエルの物語は失意から自殺という『幻滅』の主要な問題を含みながらも、この問題がすでにラファエルの意識の中で先取りされているので、第三部で展開される不安・ためらいから逃避というテーマが浮かび上ってくる。次の三つの文を並列させて読むのは興味深いと思われる。①地の文：「すすんで死を選ぶことと、青年をバリに招く希望にあふれた声との間には、どれほどの失敗した傑作，着想，使い果された詩情，絶望，押し殺された叫び，むなしい試みがあるかは神のみが知ることである。どんな自殺も憂うつをうたった崇高な詩である⁽³³⁾。」②ラファエルの言葉：「ところでいまや、ぼくたちは政治の烙印を押され、その大きな牢獄に入って、ぼくたちの幻想を失おうとしているのだ⁽³⁴⁾。」③ある新聞記者の言葉：「もし七月革命がなかったら、私は聖職者になってどこかの田舎の奥で動物のような生活を送っていたであろうに⁽³⁵⁾。」①では『幻滅』のテーマが予告されているだけでなく、積極的に青年を受け入れ、導き、活用することができない市民社会の閉塞性が物語られている。バルザックの七月王政に対する「老人政治」批判はこの現実認識による。②では市民社会における青年の登竜門である政界、ジャーナリズムに入ることのためらいが表明されている。なぜならば入れば必らず幻滅することが予感されているからである。③では七月革命によってますます青年は政界、ジャーナリズムに駆り立てられ、彼等の幻滅の危機の増大が物語られている。①、②、③と見れば、ラファエルの人生に対する不安、ためらいが現実と密接な関係にあるものとして描かれているのがわかる。

饗宴は市民社会における個人と個人との間に存在する混乱と分断のマキシマムを現わしている。各自が好きかってなことをしゃべり、他人の言うことをいっさい考慮に入れない、このいつ果てるともしれない議論の間じゅう各自は喧噪の只中で孤立している。各自がそれぞれ孤立しているからこそ饗宴はカオスとなり、バルザックは廃虚のイメージを与える。「新聞の生誕に関して、これらの革命の児たちが口にした、情けない冗談と、ガルガンチュア生誕のおり、愉快的飲んだくれが言った言葉の間には、16世紀

と19世紀を分けるあらゆる深淵が横たわっている。前者が笑いながら破壊を準備しているのに、われわれの世紀は廃虚の中で笑っていたのだ⁽³⁶⁾。」そして饗宴の最後には、バルザックはそれに死のイメージを与える。「彼は「死」を見ていた。色あせた娼婦たちにとりかこまれている毅然としたこの銀行家、飽食した人々の顔、こういう快樂の断末魔こそは、ラファエル自身の人生の姿であった⁽³⁷⁾。」ラファエルの見ている「死」とは護符によって引き起こされる彼の死であると同時に、タイユフェールに象徴される上流階級の社会の死の姿をも意味する。饗宴のこの廃虚と死のイメージはバルザックの抱いた社会像であり、彼がそこに「屍臭」を感じ取っていることは議論の余地がないが、こう考える場合、次のことを考慮に入れることが重要である。①この現実認識がバルザックを七月王政批判へと駆り立て、当時の野党である正統王朝派へと走らせる。②バルザックの抱いたこの社会像は次の世代の作家たち（フロベール、ボードレール、ルコント・ド・リールなど）の抱いたものに劣らず深刻なものであり、その限りでバルザックの先見性が問題となってしかるべきである。しかしこの社会像には冷笑や自虐の臭は微塵もなく、健全な批判精神が貫かれている。バルザックの抱いた社会像の深刻さは彼が真正面から社会と取り組み、全人間性を賭して社会を真剣に批判しえたことに起因する。③この小説をアクチュアルな青年の生き方の問題として捉えることが重要であるが、その場合、饗宴のイメージの持っている重要な意味は次のことである。すなわち第二部のラファエルの告白が彼の過去とこの饗宴とを結びつけ、悲惨な過去が現在の饗宴をますます陰惨なものとし、彼の告白がこの陰惨な饗宴に象徴される七月王政下の上流社会の腐敗、墮落に対する異議申し立てであるということである。このバルザックの強烈な現実批判が彼を創作へと駆り立てるものであり、政治へと駆り立てるものである。

Ⅲ バルザックの正統王朝主義

バルザックが初めて正統王朝派の陣営に身を投じたのは、正統王朝主義を標榜する作家たちの文集「エメラルド」（1832年1月7日出版）に『出

発』を寄せたときである。ギュイヨンGuignonはバルザックのこの政治的態度は少しも唐突な変化ではないことを主張しているが、当時においては彼を知る人々の間に疑惑と不安をまき起こした。終世変らずバルザックを暖く見守っていたカロー夫人は共和主義者としての信念から、この時はバルザックを批判した。彼女は1832年5月3日の手紙で次のように述べている。「そういう人物たちの擁護は宮廷の奉行人にやらせるのがよいのです。そしてかようなつながりによって、あなたの正当な名を汚さないで下さい。あなたが大切になされば、まだこんなにもすばらしいものになるはずのあなたの立派な才能をこうした情熱やああした争いで台なしにしないで下さい⁽³⁸⁾。」バルザックはこの批判に対して6月1日の返事で次のように答えている。「政治のことですが、わたしは高くかつ厳しい誠実な気持だけから行動しているのですから信じて下さい。政治上のわたしの計画も、政治生活も、即座に理解されるような性質のものではないのです。もしわたしが国政に何か関係を持つようになれば、後になって裁きを受けることになるのです。わたしは何ものをも恐れません。わたしはいかなる大衆から尊敬を受けるよりも数人の人々から尊敬を受けたいと思っています。あなたはわたしの知る限りにおいて最も立派な知性の持主として、この数人の中の第一位を占めている方です。それに私は大衆というものに対して深い軽蔑を感じているのです⁽³⁹⁾。」この手紙から読み取れることは、①バルザックの正統王朝派陣営への参加は思想的信念に基づいていること、少なくともバルザックはそう信じていること。②バルザックは楽天的に構えているが、彼の考えなり行動がすぐに評価される種類のものではないという自覚がすでにあること。③バルザックが欲するのは、民衆や労働者の喝采ではなく、すぐれた者たちの是認であること。ところでいったい、国の内外を問わず専制に対して蜂起し、闘い、倒れた民衆や労働者の人間的存厳を感じ取りうる人物であるバルザックが、なぜ民衆や労働者に「深い軽蔑」を感じ、正統王朝派の陣営に加わらなければならなかったのであろうか。

当時のバルザックの心情は1832年の『田舎医者』の主人公ベナシスの心情にオーバーラップしている。パリでの生活に傷ついたベナシスは、僧院

の静寂な生活に身をまかせることなく、たまたま通りかかった未開発な村落の開発に一生をささげる。開発は四段階でなされる。第一段階はクレチン病患者の収容である。ベナシスがはじめに闘わなければならないのはクレチン病ではなしに、農民の偏見である。司祭はベナシスを攻撃する説教を行なりし、猟師は森の中で彼を狙撃する。しかし諸々の困難にもかかわらず、ベナシスはクレチン病患者の収容に成功する。第二段階は村の移転である。日の照る河の反対側にベナシスは村人たちの新しい住居を作る。第三段階は農業改良である。すなわち灌漑と放牧の発展である。第四段階は村の産業化である。村を経済的に豊かにするためには富の蓄積が必要である。ベナシスは柳の木を植えさせ、籠職人を村に住ませ、そして彼にグルノーブルよりも仕事はていねいで、かつより安い値段で売るように忠告する。このようにベナシスは村の産業を発展させる。それから彼は村人たちに、村とグルノーブルとをつなぐ道路を建設させる。彼はあらゆる基礎産業を育成し、村に様々な職人を住ませる。一つの生産が他の生産を刺激する。このように偉大な指導者ベナシスは村人たちに金をもうける欲望、個人的利益を追求する精神を植えつけ、村を繁栄へと導く。

さらに重要なことは、ベナシスが彼の理想にそって村を建設する背後にある彼の現実認識である。ベナシスは激しい口調で政府を非難する。「このような政府の野蛮さが貧乏人の金持に対する闘争を助長するのです。つかの間に権力を委託された人々は、民衆に対して犯された不正の必然的な発展をまじめに考えてみなかったのです。(……) ただ一つの不正でも、それによって打撃を受けたと感じる人々の数によって増大するのです。この種は発酵します。それはまだ何でもないのです。そこから最も大きな不幸が生まれるのです。これらの不正は民衆の中に社会の卓越者に対する陰うつな嫌悪を養うのです。(……) 貧しい人々にとって、盗みとは違犯でもなければ、犯罪でもなく、復讐なのです。もし下層の人々の権利を認めることが問題であるときに、政治家が彼等を虐待し、彼等の既得権をだまし取るとするなら、どうしてわたしたちはパンのない不幸な人々に、彼等の苦しみに対するあきらめを、そして所有権に対する尊敬を要求すること

ができるでしょうか。(……)それからある人々は苦しみが過度に行き渡っているのを決して考えずに、民衆の復讐が過度であると言って非難するのは。しかし政府が繁栄よりも、個人の不幸を作り出した日には、政府の転覆は偶然の問題となるのです。民衆は政府を転覆させることによって、彼等なりに勘定を清算するのです⁽⁴⁰⁾。」これらの言葉から受け取れるベナシスの現実認識は次のように要約できる。①民衆が政府によって人間らしい扱いを受けていないという認識がある。②「政治家が彼等を虐待し、彼等の既得権をだまし取る」とか、「民衆は政府を転覆させることによって、彼等なりに勘定を清算する」とかの言葉から受け取られるように、場合によっては、民衆が政府を転覆して、革命を起こすことを正当化している感すら受ける。すなわちベナシスの現実認識は、時の政府は衆愚政治であって、国家に秩序と繁栄、民衆に平穏と幸福を与えることができないということである。そこから議会制度を否定して、権力を少数の「卓越者」の手に委ねるといふ主張が生み出されてくる。これらの主張の裏には、市民社会におけるブルジョアの凡庸ではあるが欺瞞な支配に対する激しい抗議が感じられる。スタンダールが『赤と黒』において、ジュリアン・ソレルを通してかくも見事に現わしえたように、当時の社会はほぼブルジョアによって固定化され、才能を持った者が社会の下層から上層に上るにはほとんど不可能となりつつあった。そして市民社会が確立されるとともに、バルザックの主張する卓越者の支配する社会は現実的にはほとんど困難となってくる。彼がどの程度彼の主張する王国の実現の可能性を信じていたかは知るよしもないが、市民社会が確立し、ブルジョアの凡庸性の支配が確定すればするほど、市民社会に対する彼の批判は一面において悲観的になり、民主主義的な時流に対する彼の抗議もそれに応じて厳しくなってくる。そしてそこからバルザックの強者・卓越者に対する共感、ナポレオンに対する共感も同程度に増大していく。

『田舎医者』で注目しなければならないのはバルザックのナポレオンに対する讃美である。会食者を前にしたベナシスの話と、かつて帝政兵士であったゴグラが農民を前にして語る「民衆のナポレオン」との中にそれを

見てとることができる。ベナシスは次のように語る。「わたしたちはしばしば国民的な考えを持たずに、内閣的な考えしか持たなかった人間をあまりにも多く見てきたので、本当の政治家を、わたしたちに人間の最も巨大な詩を提供する人間として賞賛しないではおれないのです。(……) 結局、大衆の感情によって生き、自己の精神の翼を広げることによって、常に大衆を支配するのです。(……) これこそ人間以上のことではないでしょうか。従って、国民のこの偉大で高貴な父親の名は永遠に民衆の人気を集めるにちがいないのです⁽⁴¹⁾。」ゴグラはナポレオンに従ってヨーロッパ中を駆けめぐった兵士であり、民衆のボナパルチストの典型である。彼は帝政時代を最もよき日々として回顧する。バルザックにとってナポレオンあるいは帝政時代は復古王政あるいは七月王政の「老人政治」批判の根拠であり、その対極として想起される若き天才が統治する王政のモデルである。

バルザックが正統王朝派の陣営に加わらなければならなかった事情および彼の正統王朝主義の分析に入ろう。分析は以下の視点で行なわれる。①バルザックの現実に対する態度、②バルザックの民衆や労働者に対する見方、感じ方、③歴史の制約、④バルザックの正統王朝主義の性格、特徴。

バルザックの現実に対する態度は首尾一貫している。彼は常に現実批判の姿勢を崩さない。すでに見た『パリ通信』や『あら皮』の深刻な社会批判、社会像はバルザックが現実を馬鹿にせずに、彼が全人間性を賭して現実を批判しえた結果である。従ってバルザックの正統王朝派への荷担は彼の現実批判の産物である。バルザックの政治的理想を裏切り、民衆や労働者を裏切ったのは七月王政である。従ってバルザックにとって諸悪の根源はこのブルジョア王政にあり、彼は徹底的に七月王政批判の立場をとる。この場合に、ブルジョアのディクタツラを乗り越えるための明確なパースペクティブが欠如しているなかにあつて、バルザックは共和主義か正統王朝主義かの二者択一をせざるえなかった。バルザックは「サン・メリ修道院の共和派の英雄たち」に対して人間的共感を抱いていたが、共和主義に対しては「活気がない」、「快活さがなく」、「個性がない」として反感を抱いていた⁽⁴²⁾。バルザックは共和主義にもブルジョアの臭をかぎつけて

いた。そこで彼はブルジョア色の希薄な正統王朝派に荷担するようになる。しかしバルザックには正統王朝派への荷担が民衆や労働者に対する裏切りとは映らない。民衆や労働者を裏切ったのはブルジョア王政であり、それを打倒しようとする正統王朝派はむしろ民衆や労働者の幸福と平穩を保障する勢力に映ったのである。ここに時代の制約と皮肉がある。

バルザックの民衆や労働者への共感の仕方は特徴的である。彼が政治上の偏見にとらわれている場合には、民衆や労働者は「忍耐と締念の生活のわく」にとどまるべき存在であり、お上から「仕事とパン」を与えられる受動的な存在である⁽⁴³⁾。その意味において、彼は民衆や労働者に「深い軽蔑」を感じていた。ここにおけるバルザックの民衆や労働者に対する好意的感情といえども同情の域を出ていない。しかし彼等が歴史的忍従から目ざめ、自らの手で自らの運命を切り開こうとするとき、バルザックの感情は人間的共感、連帯へと発展する。このことは、バルザックが政治上の偏見にとらわれることなしに、歴史の厳粛さを感じ取りうる豊かな感性を持った人物であることを物語っている。

バルザックの正統王朝主義はオーソドックスではなく、彼は党内で孤立していた。1832年6月2日の「革新者」紙で、『王党派の状況についてのエッセイ』の続篇（『現代政治論』）が近く掲載される旨が告げられていたが、掲載されなかったという事実は意味深い。ギュイヨンは確かな事実は不明としながらも、党の指導部とバルザックとの間に、「真の断絶」があったのではないかと、少なくとも双方が「お互いが自由になろうという願い」を抱いていたのではないかと仮説を述べている⁽⁴⁴⁾。バルザックの見解はあまりにも正統王朝派の枠からはみ出しているため、当然のことながら読者や選挙人から苦情と非難が出たことは想像するに難くない。バルザックは1832年9月23日のカロー夫人への手紙で次のように述べている。「わたしは戦線にあって常に気高く、高まいた態度をとるでしょう。貴族院以外は一切の貴族を打破すること、聖職者をローマから分離すること、フランスの国境を地理的な自然の状態にすること、中間階級を完全に平等にすること、実質的に優れているものを認めること、支出を節約すること、もっ

とよく課税を処理して収入を増すこと、すべての国民に教育を授けること、これがわたしの政策の要点で、わたしがこれに忠実であることをいまにお認めになるでしょう。(……) わたしはあなたに包み隠さず話しています。なぜならば、私はあなたが私の政治見解を他言なさないということを知っているからです。わたしの政治見解は、もしわたしの属する党派に知られることがあれば、憎悪の的になるような性質を持っています⁽⁴⁵⁾。」ここで要約されている見解は『現代政治論』で述べられるものとほぼ同一である。そして『現代政治論』がいつ書きあげられ、「革新者」紙の主幹のローランチの手にいつ渡ったのか正確な日時は不明であるが、1832年9月7日のローランチへの手紙でバルザックは、「私の母が私の代りに、『現代政治論』というかなり長いタイトルの論文の原稿をあなたにとどけるでしょう⁽⁴⁶⁾」と述べている。この手紙も9月23日のカロー夫人への手紙もエ・レ・バンのカストリー夫人のところから出しているし、二つの手紙の間にローランチからの連絡もないので、バルザックは自分の見解が正統王朝派の枠からはみ出していること、より正確には、はみ出さざるえなかったことをすでに自覚していたことになる。そして結局バルザックは総選挙の公認洩を契機として党から離れることになる。

『現代政治論』は『王党派の状況についてのエッセイ』の続篇をなすものであるが、バルザックの政治・社会観が体系的に述べられていることにおいて重要である。この論文の主旨はいかにしたら「国家を繁栄へと導き」「王権の栄光と民衆の栄光とを結びつける」ことが可能であるかを探求することにある⁽⁴⁷⁾。バルザックはまず民衆や労働者用のプラン、ブルジョア用のプラン、貴族用のプランの三つのプランを提示する。これらのプランの背後には「議院内閣制」に対するバルザックの批判がある。しかしバルザックにとって重要なのは、「議院内閣制」を非難することではなく、「他のいかなる政治形態よりもより長い存続を保証するために、たくみに考案される政治機構」を探求することである⁽⁴⁸⁾。

社会には、「無知で貧しい階層」と「中間層」と「貴族階層」とがある。バルザックは次のように述べている。「三つの異なる階級は自然に現われ

た。そしてこの三つの圏はどんな人間社会でも間違いなく見いだされるであろう⁽⁴⁴⁾。」

「自然契約」が貴族とブルジョアとの間で結ばれなければならない。そしてそのおかげをもって、両者は民衆や労働者に対する彼等の優位を相互に保障し合わなければならない。従って民衆や労働者を政治へのいっさいの参加から排除しなければならない。なぜならば私有財産こそが「権力の基礎」であり、「その行為の目的」である⁽⁴⁵⁾。しかし民衆や労働者には「完全な幸福」, 「仕事とパン」を与えなければならない。バルザックは彼等を統治するために三つの方策を提示する。①民衆や労働者の反抗を防ぐために、彼等から指導者を引き離さなければならない。そしてその指導者が政治に参加することを可能にすることによって彼等を懐柔しなければならない。②民衆や労働者の意気盛んな部分を軍隊に入れて、国の防衛に役立てねばならない。③民衆や労働者を保守化させるために小土地所有を発展させねばならない。バルザックは次のように述べる。「貧乏人, 職人, 労働者の悪習と不幸が多く、社会危機に裁きを与えるものである。それから土地を有する農民はいかなる政府に対しても友好的である⁽⁴⁶⁾。」

ブルジョアに関してのプランは民衆や労働者の場合とはまったく異なる。バルザックは次のように述べる。「政治的な利害と政治思想は中間階級から始まる。そこに1789年の危険があったし、1830年の危険もそこにあった。中間階級に大きな分け前を与えず、政治界で自由に呼吸させておかなければ、いかなる政体にとっても危険はそこにあるであろう⁽⁴⁷⁾。」ブルジョアには政治参加の範囲をできる限り広げなければならない。議会はこの階級のメンバーだけで構成すべきである。なぜならば議会は「中間階級の表現」だからである。もし政府がこの掟に従わなければ、ブルジョアを革命へと駆り立てることになる。議会は政府ではなく、「政府の一つの手段」に他ならない。主要なことは議会をできる限り非攻撃的にすることである。そのためには、政府はブルジョアにいかなる不平の種をも与えてはならない。ブルジョアは平等を渴望しているので、貴族院以外での貴族の称号は大胆に廃止すべきである。

貴族には二つの果すべき役割がある。貴族はブルジョアと国王との間の「柵」であると同時に「指導的内閣」でなければならない。しかし貴族院は国家のあらゆる「卓越者」に開かれていなければならない。バルザックは次のように述べる。「もし政治というものが社会的利害と社会的情熱とを調整する術であるとするならば、卓越者を離心した運動に委ねるのではなく、彼等の動きを規正し、国家の偉業と存続とに貢献させる必要があることは明白ではないであろうか⁽⁵³⁾。」

最後に王権に関しては、王権は「権力の原理」であり、「あらゆる議論の外」に置かれねばならない。従って王権は民衆の投票に基づくのではなく、正統王位継承権に基づかなければならない。バルザックは次のように述べる。「正統王位継承権はどんなに不条理に見えようとも、もし存在していなければ発明すべき原理であろう。それは世襲財産の印であり、国家を包み国家を一つの緊密な体系にしている権威のひそかな絆である⁽⁵⁴⁾。」

以上が『現代政治論』のプログラムである。バルザックの意見は正統王朝派の枠からはみ出していることは明らかである。①バルザックはためらうことなく復古王政を批判している。②バルザックは王権を不条理呼ばわりし、支配の手段としてしか見ていない。③これは最も重要なことだが、バルザックは小土地所有の発展を主張している。従ってバルザックは、彼の属する党派の大部分、すなわち貴族、特権者、長子権と大土地所有制の主張者たちの偏見と非難に遭遇することになる。結局バルザックの正統王朝主義はオーソドックスではなく、彼の現実批判の衣装に他ならない。彼の考え方の中心は、いかにしたら国家を繁栄へと導き、民衆や労働者の幸福が作り出せるか、いかにしたら社会秩序を保てるかという二点にある。これらの発想が彼の誠実さと善意に基づいていることは忘れてはならない。躍動期にあるフランス市民社会の中に「屍臭」を感じ取ったバルザックには、ブルジョア王政が国家に繁栄と秩序をもたらすことができるものとは考えられなかった。共和主義に共感できないバルザックは結局時代の制約の中で、正統王朝派に頼らざるえなかった。従ってバルザックが政治的には正統王朝派であったと言うときに、重要なことは次のことを念頭に置く

ことである。①バルザックの正統王朝主義は、現実に対する姿勢の点で彼の芸術と密接な関係にあり、すでに「滅びゆく社会の屍臭」を感じ取った彼の市民社会批判の一つの現われであること、②ブルジョアのディクタターを乗り越えるための明確なパースペクティブのない歴史の制約下で、バルザックはブルジョア王政のかなたに若き天才が統治する王政を夢想したこと、③その実現のためには、現実に存在する政党の支持をぜひとも必要としたこと、それが正統王朝派であったこと、④バルザックの正統王朝主義はオーソドックスではなく、彼は孤立した正統王朝主義者であったこと、それを彼が自覚していたこと、⑤バルザックが政治上の偏見にもかかわらず、歴史的忍従から目ざめ、蜂起し、倒れた民衆や労働者や彼等を指導した共和主義者たちの人間的存厳を感じ取り、人間的共感・連帯を抱きうる人物であったこと、歴史の必然とその厳粛さとを直観的に感じ取りうる豊かな感性を持った人物であったこと、である。

註

使用テキスト：Pléiade 版の *La Comédie Humaine* (C. H.) と Conard 版の *Œuvres diverses* (O. D.)

- (1) *Le Code des gens honnêtes*, O. D. I*, p. 67.
- (2) Guyon, *La Pensée politique et sociale de Balzac*, Colin, 1967, p. 211. を見よ。
- (3) Curtius, *Balzac*, Grasset, 1933, p. 148. を見よ。
- (4) Barbéris, *Balzac et le mal du siècle*, Gallimard, 1970, を見よ。
- (5) Lukács, *Balzac et le réalisme français*, Maspero, 1967, p. 49. を見よ。
- (6) *Lettres sur Paris*, O. D. II, p. 114.
- (7) Ibid. p. 115.
- (8) Ibid. p. 115.
- (9) *La Préface de la Peau de chagrin*, C. H. XI, p. 177.
- (10) 現象的には七月革命の前後の時期に社会諷刺、批判の一連の作品が生まれたこと、文学が政治性を帯びてきたこと、作家の政治参加が一般に行なわれたことなどがあげられよう。たとえばサント・ブーブ、ラマルチーヌ、ユゴー、スタンダール、ヴィニー等。
- (11) O. D. II, p. 67.
- (12) Ibid. p. 79.
- (13) Ibid. p. 141.

- (14) バルザックの理想は1832年の『現代政治論』で理論化され、同年の『田舎医者』で具体的イメージが与えられる。
- (15) O. D. II, p. 66.
- (16) Ibid. p. 83.
- (17) Ibid. p. 65.
- (18) Ibid. p. 85.
- (19) Ibid. p. 70.
- (20) Ibid. p. 105.
- (21) Ibid. p. 120.
- (22) Ibid. p. 75. を見よ。
- (23) Ibid. p. 66. を見よ。
- (24) Ibid. p. 140.
- (25) *Balzac et le mal du siècle*, pp. 1420-1421. を見よ。
- (26) Claude Duchet の序 (Musset: *La Confession d'un enfant du siècle*, Garnier, 1968) 参照。“siècle” という言葉は二つの意味合いを含んでいる。
 ①現在を告発する意味合い、たとえばジョゼフ・ドメートル、ラムネー、シャトブリアン。“absence de foi”, “manque”, “laideur”, “douleur morale” の意味合い、たとえばミュッセ。②現在を肯定する意味合い, “gloire”, “énergie”, “espoir”, “avenir”, “jeunesse”, “vouloir vivre”, “ambition” を意味する。たとえば若きバルザックは『ステニー』の中でジョブに次のように言わせている。“C'est à nous jeunes gens, *enfants du siècle et de la liberté*, à favoriser l'aurore du bonheur des nations, à faire accorder la sûreté des trônes avec la liberté des peuples...” (éd. Prioult, G. Courville, pp. 17-18) しかし1848年以後の「世紀児」の「世紀」からは②の意味合いが完全に姿を消してしまうことになる。
- (27) Berthoud の témoignage, *L'Année balzacienne*, 1962, p. 227. を見よ。
- (28) Correspondance. I. Garnier, p. 501.
- (29) *La Peau de chagrin*, C. H. IX, p. 15.
- (30) Ibid. p. 93.
- (31) Ibid. pp. 44-45.
- (32) Ibid. p. 41.
- (33) Ibid. p. 18.
- (34) Ibid. p. 46.
- (35) Ibid. p. 47.
- (36) Ibid. pp. 52-53.
- (37) Ibid. p. 163.
- (38) Corr. I. p. 711.

- (39) Ibid. p. 731.
- (40) *Le Médecin de campagne*, C. H. VIII. p. 392.
- (41) Ibid. pp. 446-447.
- (42) *Lettres sur Paris*, p. 75.
- (43) *Essai sur la situation du parti royaliste*, O. D. II. p. 534. *Du Gouvernement moderne*, O. D. II. p. 551.
- (44) Guyon, supra, p. 610. を見よ。
- (45) Corr. II. pp. 128-129.
- (46) Ibid. p. 113.
- (47) O. D. II. p. 556.
- (48) Ibid. p. 550.
- (49) Ibid. p. 550.
- (50) Ibid. p. 551.
- (51) Ibid. p. 552.
- (52) Ibid. p. 552.
- (53) Ibid. p. 555.
- (54) Ibid. p. 556.